

図書館たより

号数 第58号
発行日 昭和57年12月20日
編集行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 渡部印刷株式会社

親子読書へのとりくみ

松江市立古江幼稚園

古江幼稚園では、56年6月に県立図書館から待望の絵本167冊を借り、心はずんで親子読書活動を開始した。初めに図書館の先生を迎えてPTA研修会を開き、親子読書の理解を深めた。

幼児たちは、貸出日の水曜日がくると自分の選んだ絵本を抱えて係のお母さんの前に並ぶ。この頃は「Mちゃんが面白いと言ってたあの本にしよう。」とか、「弟が喜ぶからまたこれにする。」などと目的をもって選んでいる。同じ絵本を何度も借りてくると、「またこの本なの。」という母親もいたが、幼児は自分なりに意図して借りているのだということや、同じ絵本でも想の広がり方に変化があることに気づき次第に幼児と共に読書を楽しむ親の姿へと変ってきた。

時には、保育参観日の後で親子いっしょに絵本を選べる機会を設けてみた。たくさんの素晴らしい絵本に接した親子の目は、喜びに輝いていた。

以前は、親子で読書することに無関心であったり、大切だとわかっていても本の選び方が分からぬ親もいてとまどっていたが、こうした機会に恵まれ、今では軌道に乗ったことは、大変幸せだったと思う。

また、折々に研修会を開き、親の工夫や苦労などを話し合い、図書館の先生のご指導を受けて深めている。

このように親子読書活動を続ける一方、園内でも絵本指導を中心とした研究主題を設け、保育実践を重ねている。一冊の絵本がきっかけとなり、幼児の遊び（生活）へ発展したり、逆に遊びから絵本へ移

行する場合もある。ある朝、園庭で4歳児数名が、「ね、Tちゃん、ぶらんこのせて!」「うん、数えてよ。」「1・2・3…。」「でも、今はのんたんごっこじゃないもん!」「じゃあ幼稚園を一周してくるから代わってね!」「いいよ!」と、自分たちで想像した絵本の世界で楽しんでいた。また、「はははのはなし」から、「歯の痛い人は桜組さんに来てください。」「これを食べましたか。」などと、歯医者さんごっこが始まることがある。最近では「からすのパンやさん」になり、自然物でパンづくりをしたり、「ぐりとぐらのおきゃくさま」から近づいたクリスマスへの夢を抱き、造形活動へと発展させていった。この翌日、「先生、お母ちゃんが今度は『ぐりとぐら』の本を借りて来たらって言ってたよ!」という幼児の言葉から、園での遊びを我が家への親子読書へ持ち込もうとする母親の姿がうかがえた。

また、年に一回、親子読書感想文集を作っているが、その中には、次のような文章がある。

- おじいちゃんから七五三の祝金が届き、さっそく絵本を買い“おじいちゃん文庫”と名づけた。これは本当にグッドアイディア……。
- Bさんは目が不自由だが、自分の感想をまず点字で打ち、5年生の長女さんにかな書きさせて提出された。これには大変感動した。

現在、PTAの協力で150冊の絵本を購入し、10月より念願の“ふるえ文庫”がお目見えした。

このように、親子読書が定着しつつあることを嬉しく思うと同時に、健やかな幼児の育成を願い、園と家庭が協力し合って、ますます充実発展するよう努力したいと考えている。

文責 教頭 吉野美智子

逐次刊行物

ご利用ください ⑥

雑誌・新聞について

島根県立図書館には、現在、購入新聞15種、寄贈新聞約30種、購入雑誌168種、寄贈雑誌約300種、その他、官報、国会議事録（衆議院、参議院）等の逐次刊行物を所蔵しています。これらの収集・保存は、現代の図書館にとって、欠くことのできない重要な仕事です。

国内の出版点数は、雑誌だけで1万種、新聞3千5百種ともいわれ、「'82年版雑誌新聞そかたろう」による限られた予算の中で収集できるのはほんの一部です。しかし、単行本以上に、これから的情報社会で必要性が高まり、大きな位置を占めるようになるでしょう。

まず、新聞は「山陰中央新報」「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「中国新聞」「日本海新聞」「日本経済新聞」「サンケイ」「アサヒイブニングニュース」「日本農業新聞」「日刊工業新聞（縮刷版のみ）」「毎日小学生新聞」「毎日中学生新聞」「週刊読書人」「日本読書新聞」等、その他、政党新聞各種を所蔵しています。

近年は縮刷版や、マイクロフィルム化した新聞も入ってきています。マイクロフィルムは、古いものは、明治15年からあり（山陰新聞）、現物の汚破損を防ぐため、年次を追って作成しています。（今年度中、山陰中央新報昭和41年分まで作成）これらはマイクロフィルムリーダーにかけて、見たい日付、記事を検索し、又、コピーすることもできます。

新聞は過去の歴史と現在の情況の両方を知る上で最も確かな、最も新鮮な資料です。一般的には、今日の新聞は明日には新聞紙になってしまうのですが、図書館では、貴重な資料として保存しています。

官報は明治38年から所蔵し、新旧の法令等をみることができます。

雑誌は、一般的な週刊誌、月刊誌の他に、種々の公共機関、企業、大学等から発行される研究紀要、

所報、月報等もあり、年々、数が増えています。

現代のできごとを、最も早く人々に知らせる手段として、雑誌は新聞と共に不可欠であり、図書館の仕事の一つである、レファレンス業務（参考業務）にも、威力を発揮します。まだ単行本になっていない時事的な記事や評論は雑誌に頼って解決することができます。又、数誌にわたって比較検討することもでき、社会的評価ができるまで、自分なりの意見をもつ手段ともなります。

趣味的なことだけでなく、学生、研究者にも満足してもらうために、バックナンバーの充実、ツールの完備も必要です。問合せは「何という雑誌の何年の何号を欲しい」と具体的なものばかりではありません。たとえば、社会的な問題で「ポーランド情勢について知りたい」という質問がきた場合、ツールがあれば、その索引を引くことができ、問題の起きた時期の雑誌を捜す手間が省けます。国文学関係では、ある作家についての特集号を捜せば、その作家の過去の評価、現在の評価が両方得られ、小説等で単行本にならずに、雑誌にのみ載るものは貴重な資料となります。医学界、経済界等、専門分野の世界の情勢は、会誌として発行される逐次刊行物が最も適確に現状を伝えてくれ、どこの分野でも一応、業界紙はあるようです。

又、月遅れの雑誌は貸出もしもしています。一般向の雑誌では「文藝春秋」が断然トップ、根強い人気を保っています。その他、「歴史読本」等の歴史もの、「ニューハウス」「壮快」「自家用車」等がよく借りられ、婦人雑誌の「マダム」「暮しの手帖」「婦人公論」もよく貸し出しにでています。中学生、高校生が好むのは、「初歩のラジオ」「電波科学」「トランジスタ技術」等のオーディオ関係が多く、貸出しの傾向も、その時々の世相を反映しているようです。

趣味、娯楽、調査、研究に幅広く、雑誌、新聞を御利用ください。

こどもの本

⑩

だいくとおにろく

赤羽末吉絵 松居 直再話

福音館書店

流れの速い川に橋をかける仕事を頼まれただいくが思案にくれていると、水の中から鬼が顔を出した。鬼はだいくに目をよこせば橋をかけてやっても良いという。だいくがいい加減な返事をしているうちに橋がかかり、だいくは目玉をとられそうになるが名前をあてて勘弁してもらう。墨絵と彩色画を交互に使い、鬼の表情の動きがユーモラスに描かれている。日本民話の世界が楽しく表現されていて人気のある絵本の一冊である。



(モチモチの木)

もりのなか

マリー・ホール・エッツ文・絵 間崎ルリ子訳
福音館書店

小さな男の子がラッパを持って森の中に入つて行く。すると、ライオン、ゾウ、クマ、カンガルー、コウノトリ、サル、ウサギがついてくる。次々と男の子の散歩に加わつてみんなで楽しく遊ぶ。最後にかくれんぼして男の子が目をつぶると、その間に動物たちは全部消え父親が立っていた。

コンテで描かれた白黒の絵はかえってあざやかで、ひとりで森へ行く男の子の心理を巧みに表現している。空想と現実の世界を行つたり来たりして静かに深く子どもの心をとらえている。

モチモチの木

滝平二郎絵 斎藤隆介著
岩崎書店

おくびょうで甘えん坊の豆太は夜ひとりで小便にも行けない。ある夜腹いたをおこしているじいさまのため、こわさを忘れ夢中で医者を呼びに走った。帰り道、勇気ある子しか見ることのできないというモチモチの木に灯がともるのを見た。

素朴で力強い切り絵のタッチと柔らかな色彩とが融けあい、真実の愛と勇気について語りかけている。

はけたよはけたよ

にしまきかやこ絵 神沢利子文
偕成社

タツくんはひとりでパンツがはけない。片足あげてはこうとするとどでん。パンツなんかはかないやと外へ飛び出す。犬、猫、ねずみ等の動物に「しっぽのないおしり」と笑われ、ついに自分で工夫してパンツがはけるようになる。

明るい色彩で柔らかな絵は快いふん団氣をあらわし、子どもの心を巧妙にとらえる。

ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ絵・文 石井桃子訳
福音館書店

大きな庭のまん中に住んでいるふわふわさんとふわおくさんといううさぎの夫婦に女の子が生まれ、うさこちゃんと名付けられる。第1集から第5集まであり、幼児から小学生まで幅広く読まれている。どの作品も単純明解なストーリーで、デザイン化された強い原色の絵が子どもの目をひく。シリーズ名は「子どもがはじめてでう絵本」となっているが、子どもの周辺にある題材を使ってきちんとしたストーリーにまとめられているため、お話を楽しみはじめる3、4歳以上の子どもに与えたい。

毎年、図書館業務に関する各研究集会が全国各地において開催されています。今年度、島根県立図書館が参加した主な会の概要を紹介します。

データベース設計入門セミナー

昭和57年6月28日～7月2日

東京地方自治情報センター

データベースとは、情報を得やすくするためのひとつ道具であり、種々の業務に利用できるように統合化された共用ファイルである。ということで、データベースは特定の処理とは結びつかないデータの汎用性が特徴であり、そのため設計にはすぐれた先見性が必要である。それには業務内容を把握し、分析することが大切であることを根底に概論及び実践報告があった。

全国図書館大会（公共図書館部会）

昭和57年10月14日～16日 福井県

この部会では、福井の城下町丸越に中野重治氏の蔵書の寄贈を契機として図書館ができたその過程、市町村立図書館設置率100%の富山県と、大都市千葉市の図書館ネットワークの構想と課題、杉並区立図書館のシステム構想の4つの事例が発表された。また研究協議では、仕事増量のために機械の導入の必要性、司書の研修の必要性、生涯教育の場として住民のニーズにどう対処していくかなどが討議された。

全国公共図書館整理部門研究集会

昭和57年10月21日～22日 佐賀県

今回は整理業務委託の問題点をテーマとして、市町村立、県立の立場から事例発表を交え、多くの質問に議論がたたかわされた。ここ数年飛躍的に奉仕活動をしている市町立図書館では何らかの形で機械化や図書資料の増加による委託をせざるをえないのが現状である。今後図書館奉仕を円滑に遂行するため、正確、かつ迅速な整理業務をよりいっそう検討せねばならない。

中国地区図書館研究集会

昭和57年9月17日～18日 岡山県

“公共図書館における逐次刊行物の位置づけ”
公共図書館においては、新聞雑誌等の逐次刊行物

は図書に比べ軽易なものと考えられがちである。しかし、情報化社会と言われる今日NOWな情報を得るためにには、もっと逐次刊行物を利用する必要が増大しているのではないかという観点から研究討議が行われた。そして、公共図書館の逐次刊行物は収集保存利用について断定出来ない非常に多くの問題を含んでいるとして沢山の視点が提起されその結果上記の3点（収集保存利用）について各図書館で今まで集めていた雑誌の再検討をすべきであるという結論に達した。

全国公共図書館奉仕部門研究集会

北日本図書館連盟奉仕部門研究協議会

昭和57年9月30日～10月1日 天童市中央公民館
住民の学習需要が増大し、生涯教育の重要性が強調される今日、図書館に寄せられる期待もさらに大きくなるものがある。この期待に応える実践的方法について研究協議を深め、奉仕活動の一層の充実強化を図るよう、210名が参会し研修した。

児童に対する図書館奉仕全国研究集会

昭和57年10月6日～7日 鳥取市文化センター

現在の子どもをとりまく社会環境の中で、すべての子どもが読書のよろこびを知り、習慣づけるにはどうしたらよいかを考える。それには地域の関係機関との連携が大切である。①公共図書館間の連携。②学校図書館との連携。③地域社会との連携。等について研究協議がなされた。

昭和57年度日本図書館協会公共図書館部会参考事務分科会

昭和57年10月28日～29日 群馬県立図書館

東洋大教授の「図書館協力をどうすすめるか」のテーマで講演。研究発表は、青森県立図書館でのハンドメイドツール作成についてと、前橋市立図書館が市立と群馬県立図書館とのレファレンスの相互協力の実際を説明。大阪府立中之島図書館は同館で実施している異種館での相互協力促進のための、調査活動の現状報告があった。